

原町市埋蔵文化財調査報告書 第13集

# ふるさとづくり道路改良工事 関連遺跡発掘調査報告書

まえやしき  
前屋敷遺跡 第2次調査

1997年3月

福島県相双建設事務所  
福島県原町市教育委員会

原町市埋蔵文化財調査報告書 第13集

# ふるさとづくり道路改良工事 関連遺跡発掘調査報告書

まへやしき  
前屋敷遺跡 第2次調査

1997年3月

福島県相双建設事務所  
福島県原町市教育委員会



## 序

文化財は、わが国の長い歴史のなかで生まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民共有の財産であり、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものであります。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることができなかった生活の様子や文字がまだ無かった時代の人々の暮らしについて多くの情報を私たちに与えてくれます。

近年、原町市域では広範囲にわたり開発の波が押し寄せつつあります。その一方、長い歴史のなか引き継がれてきた埋蔵文化財が一日にして失われてしまう危険性があります。このような状況のなか、教育委員会では埋蔵文化財の保護、保存に努めているわけですが、平成7年度に、ふるさとづくり道路整備事業の一環としての県道下洪佐・南新田線の改良工事に伴い、前屋敷遺跡の発掘調査を実施し、その内容を記録として残すことといたしました。

調査の結果、縄文時代の土坑や奈良・平安時代の土器が発見されました。本書はこれら発掘調査の成果を公表するためにまとめたものであります。今後、これを契機として地域の文化財保護のためにお役立ていただければ幸いに存じます。

おわりに、調査および本報告書の刊行にあたってご指導いただきました福島県教育庁文化課および、県立原町高等学校の玉川一郎教諭、また、調査にご協力いただきました相双建設事務所の皆様に深く感謝いたすとともに、調査に関係された各位に衷心より謝意を表します。

平成9年3月

原町市教育委員会

教育長 井村 寛



## 例 言

- 1 本報告書は平成7年度に原町市教育委員会が実施した県道下洗佐・南新田線改良工事にかかる原町市上洗佐字前屋敷所在の前屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、福島県相双建設事務所より委託を受け、原町市教育委員会が主体となり発掘調査を担当した。
- 3 今回の調査は前屋敷遺跡の調査としては第2次ものである。
- 4 発掘調査、報告書作成にあたり、次の機関および個人から指導助言を得ている。  
福島県教育委員会文化課 玉川一郎（原町高等学校教諭）
- 5 本報告書の執筆および編集は原町市教育委員会 堀 耕平、荒 淑人、相良英樹が行なった。
- 6 調査で得られた資料は、原町市教育委員会が保管している。



# 目 次

序	
例言	
目次	
第1章 調査に至る経過	1
第2章 原町市をとりまく環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	4
第3章 遺跡の位置と周辺の遺跡	8
第1節 遺跡の位置	8
第2節 周辺の遺跡	8
第4章 調査経過	11
第1節 調査要項	11
第2節 調査方法	12
第3節 調査経過	12
第5章 調査成果	13
第1節 基本層序	13
第2節 遺構と遺物	15
1 土坑	15
2 焼土跡	15
3 木炭窯跡	17
4 遺構外出土遺物	17
第6章 まとめ	22

写真図版  
報告書抄録





## 第1章 調査に至る経過

県道下渋佐・南新田線は原町市街地から海浜方面に走る主要幹線道路である。しかし、前屋敷遺跡周辺に至り道路が狭くなり、しかも泉方面へはクランク状になるため、以前からスムーズな車両の通行ができなかった。このため、福島県相双建設事務所はふるさとづくり道路整備事業の一環として、このクランク状の部分を拡幅する計画を立て、平成6年度に路線上の埋蔵文化財について、原町市教育委員会に照会した。

原町市教育委員会では、計画路線上に前屋敷遺跡があり、現道部分については既に遺跡が削平を受けている可能性が高いが、新たに拡幅予定の部分については、旧地形が残されており、隣接する空き地から縄文土器や土師器が拾えることから、遺構・遺物が確実に予想されるため、この部分については、試掘調査を待つまでもなく遺跡保存の対象となる旨を回答した。しかし、計画路線について工法上の対応が困難なため、原町市教育委員会が、相双建設事務所の委託を受け、発掘調査を実施することとなった。発掘調査の時期は平成7年の秋ごろまで調査を終了することで合意した。



図1 遺跡位置図

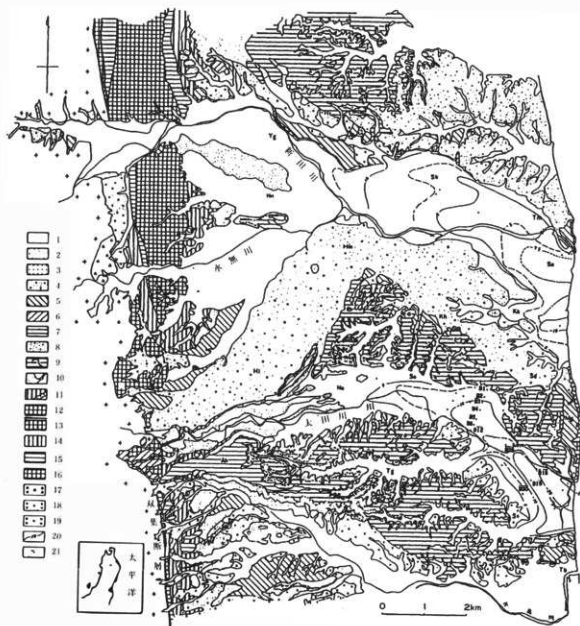
## 第2章 原町市をとりまく環境

### 第1節 地理的環境

福島県原町市は、浜通り地方のいわゆる阿武隈高地東縁部東部の低地帯北方、相馬地方のほぼ中央に位置しており、東は太平洋に面し、行政境としては北は相馬郡鹿島町、南は小高町、西は飯館村・双葉郡浪江町と境界を接している。人口は約50,100人、面積は約199.66km<sup>2</sup>で、当地方の産業及び政治面での中核都市となっている。主要交通網は南北方向に縦走するJR常磐線と国道6号線であり、仙台方面や市内などへの通勤・通学手段として利用されている。

原町市の地形は、西部域を南北方向に縦走する阿武隈高地、そこから派生する相双丘陵・常磐丘陵と称される標高100m以下の低丘陵、及び丘陵間に開析された沖積平野とで構成されている。全体として阿武隈高地にかかる西側が高く、東部にいくにつれて標高を下げている。阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯とは双葉断層(岩沼-久之浜構造線)によって地質的に明瞭に区分され、低地帯もまた断層以東の相双丘陵地域と以南の常磐丘陵地域とに区分されている。阿武隈高地は東西約50km・南北約200kmの規模を有し、古生代から新生代中頃の第三紀中新生に至る地質を有し、北上高地と並ぶ日本最古の地質構造を形成している。基盤層は古生代末期のアバラキア褶曲と中生代末期のララマイト褶曲に代表される二度に渡る世界的な造山運動の際に、古生層及び中生層に貫入した古期及び新期・最新期の花崗岩、変成岩類である。地形的には山頂がなだらかな隆起準平原を呈しており、原町市付近の標高は500～650m前後になっている。

阿武隈高地裾部から東に派生している低丘陵は、新生代第三紀に形成された固結度の低い凝灰質砂岩で構成されており、双葉断層により、上層部の相双丘陵(滝の口層)と中・下層部の常磐丘陵地域とに区分されている。高地周辺では標高100～150m前後を測り、東延するにしたがって徐々に高度を下げ、海岸部では20～30mを測る。第四紀洪積世における氷河期と間氷期の海水準変動により、丘陵上には海成及び河成の段丘が構成され、高位より順に第1段丘、第2段丘、と命名されている。原町市内では埋没段丘を含む7段丘の存在が知られており、特に第1段丘である畦原段丘と第4段丘である雲雀ヶ原扇状地が発達しているが、他は河川上流域沿いに小規模に分布する在り方を呈している。低丘陵の間には、各河川が樹枝状に開析した谷間に土壌が埋没した沖積平野が入り込んでいる。標高は20m以下であり、縄文時代前期を中心とする海進期には海岸部の大部分が海水面下にあったと考えられており、大木2a式期の遺跡である萱浜の赤沼遺跡の調査では、海水面を標高6m前後に求めている。現在では圃場整備が進み、一面の美田地帯が形成されている。



- 1: "沖積層", 2: 第6段丘構成層, 3: 第5段丘構成層, 4: 第4段丘構成層, 5: 第3段丘構成層, 6: 第2段丘構成層, 7: 第1段丘構成層, 8~11: 竜の口層, 8: 同c層(砂岩), 9: 同c層(シルト岩・京塚沢凝灰岩), 10: 同b層, 11: 同a層, 12~19: 基盤岩類, 12: 塩手層, 13: 小山田層, 14: 富沢層, 15: 中の沢層, 16: 駒澤層, 17: 古生層, 18: 花崗岩類, 19: 脈岩, 20: 竜の口層上面標高(m), 21: ホーリング地点と孔番, Ah: 畦原, Bb: 馬場, Hi: 雲雀ヶ原, Hm: 原町市街, Ht: 東高松, Ka: 菅浜, Kh: 北原, Kk: 片倉, Mg: 間形沢, Mm: 米々沢, Nn: 長野, No: 中太田, Om: 大栗, Sd: 下, Se: 下江井, Sk: 下北高平, So: 下太田, Ss: 下渋佐, Tb: 塚原, Tg: 鶴谷, Tm: 船前, Yg: 横上

図2 原町地域の地質図 (原図 1979 中川他)

## 第2節 歴史的環境

最近の原町市では、火力発電所建設や県営会場整備事業及び海浜リゾート計画であるCCZ建設などの大規模開発が推進されており、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査により、従来不明であった弥生時代の遺跡の在り方や、浜通り低地帯における律令期の政治動向を究明する一端となるような多大な成果が続々と報告されてきている。原町市では、これまでも分布調査や発掘調査を通じて遺跡の保存・活用に努めてきたが、今後増加の一途をたどるこれらの遺跡に対して、高一層の保存・活用の努力が求められているところである。

また、平成7年(1995)には国指定無形民俗文化財「相馬野馬追」の織り広げられる野馬追祭場地の東隣に「野馬追の里歴史民俗資料館」建設され、当地方の歴史・民俗における生涯・社会教育の場として、その活動が期待されている。

原町市における旧石器時代の遺跡は現在のところ、遺物の出土する散布地が9ヶ所知られている。立地条件を概観すると、畦原A遺跡、熊下遺跡、袖原A遺跡などは太田川流域の第1段丘面の畦原段丘上に所在し、陣ヶ崎A遺跡、西町遺跡、橋本町A遺跡、桜井遺跡などは第4段丘面の雲雀ヶ原扇状地に所在している。

縄文時代の遺跡は早期末から前期初頭の住居跡の調査が行なわれた片倉の八重米坂A遺跡、隣接する羽山B遺跡などが阿武隈高地裾部に所在している(註1)。太田川を北に臨む第1段丘面に所在する片倉の畦原F遺跡の調査(註2)では早期末から前期前葉の土坑3基が調査されている。この時期は、高地寄りに立地する遺跡がある一方で海浜側の微高地に所在する遺跡も知られている。前期初頭の大木2a式の土器片が出土した萱浜の赤沼遺跡(註3)や前期前半の土器片が多量に発見された雫の犬遺跡は雲雀ヶ原扇状地の先端部の微高地上に所在しており、該期の古環境を知る上での貴重な成果を上げている。

中期の遺跡は、大木9～10式の土器片を多量に出土する押釜の前田遺跡が阿武隈高地裾部の低位丘陵に立地しており、新田川流域の第3段丘面上に所在する上北高平の高松遺跡周辺から西側の平坦面一帯は、末葉の大木8a～10式土器片を出土することで知られている。高松遺跡の東方約1km、同段丘面上に立地する榎松遺跡では、昭和52年(1977)の宅地造成に伴う発掘調査により、大木10式期の複式炉を伴う竪穴住居跡1棟が市内で初めて調査されている。

後期から晩期の遺跡は、大洞C1～A式期土器片を出土した片倉の羽山遺跡など多くの遺跡が市内各地に所在している。浜通り低地帯の海岸部には多くの貝塚が所在しているが、原町市では全く確認されておらず、現在まで空白地帯となっているが、今後発見される可能性を秘めている。

弥生時代の遺跡は、東北地方南部の標式土器として使用されてきた中期末葉の桜井式土器を出土する桜井遺跡(註4)が知られていたが、最近の調査では、海岸部の丘陵の尾根部に小規模な集落を構成していた例や海浜寄りの低位丘陵中から土器や石庖丁が出土する例が報告されている。また、平成5年(1993)に調査された高見町A遺跡からは弥生時代の後期に位置付けられ

る十王台式土器を出土し、その北限となる竪穴住居跡が2棟発見されている(註5)。古墳は、前方後方墳として東北第4位の規模を誇る国指定史跡の桜井古墳が新田川南岸の河岸段丘上に所在しており、周辺の古墳と共に桜井古墳群を構成している。桜井古墳は昭和58年(1983)に範囲確認調査(註6)が行なわれており、軸長約72mの墳丘部に、幅約11~20mの周溝が巡っていたことが確認されている。

他に昭和42年(1967)に、中太田所在の墳丘部軸長約40mの前方後方墳と推定される与太郎内1号墳、桜井所在の墳丘部直径約12mの円墳である高見町1号墳の発掘調査が行なわれ、高見町1号墳からは粘土施設を伴う削竹形木棺の痕跡が確認されている(註7)。

平成5年(1993)の高見町A遺跡の調査では、既に削平されてマウンドや埋葬施設は未発見であったが、外郭直径約15m、幅約2mの円形の周溝1基が発見され、高見町2号墳と命名されている。この調査では塩釜式期の竪穴住居跡2棟が市内では初めて発見(註5)されており、この地域が弥生時代から古墳時代への変遷や古墳の出現過程について極めて重要であることを示している。高見町遺跡は同時に桜井古墳群高見町支群としても重要な地域で、平成7年には市道予定区域とその西側の部分について発掘・試掘調査が実施され、古墳8基、周溝を伴わない刳抜石棺3基、箱式石棺1基の他、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡21棟が確認されており、同古墳群の密度の高さをあらためて示している。

この他、市内各地の丘陵上に古墳が築かれており、北泉の地藏堂古墳群、江井の西谷地古墳群、鶴谷の五治郎内古墳群などが所在している。

後期になると、当地方でも横穴が多く作られている。現在確認されている分布状況を見ると、鹿島町との境に近い新田川北部の上北高平に北沢横穴群、京塚沢横穴群、新山前横穴群、北泉に大磯横穴群、地藏堂横穴群、太田川北部の上太田に道内迫横穴群、大麩に西迫東迫横穴群、零に坂下横穴群、太田川南部の高には、昭和40年(1965)に調査された高林横穴群(註8)などが河川流域の沖積平野を望む丘陵に所在しており、古墳の分布の在り方とはほぼ合致している。また、中太田の中畑横穴群、羽山横穴群、上太田の新橋横穴群は、雲雀ヶ原扇状地を望む丘陵に所在している。この内、昭和48年(1973)に発掘調査が行なわれた国指定史跡の羽山横穴は、玄室奥壁に壁画が描かれており(註9)、調査後に保存処理を施して年間4回の一般公開を通して社会教育に役立てている。

奈良・平安時代の遺跡は、律令体制のもとに行方郡家に擬定される泉麿寺跡や軍団跡に擬定される植松麿寺跡が新田川北川の丘陵裾部に所在している。両遺跡についてはこれまで発掘調査による成果はなかったが、泉麿寺跡については、平成6年度(1994)、県史跡内の従来焼け米が出土する地点から西側で、宅地新築に伴う試掘調査により、8~9世紀代の掘立柱建物跡と礎石建物跡が検出されると共に、掘立柱建物跡から礎石建物跡への変遷が確認された。平成7年度には県史跡の南東外側で、官衛的な色彩の強い一本柱列跡が2列発見され、今後の調査が期待される。両遺跡からは布目瓦が出土しており、供給源として泉麿寺跡は大麩の京塚沢瓦窯跡が、植松麿寺跡は昭和59年(1984)に国士館大学により発掘調査が行なわれた入道迫瓦窯跡(註10)が考えられている。この他、馬場の滝ノ原遺跡では平安時代の須臾器窯跡3基が調査さ

れ、杯、長頸瓶などが出土している。

また、海岸部の金沢の丘陵の帯には大規模な製鉄遺跡が所在している。平成元年度(1989)から5年度までに、財団法人福島県文化センター遺跡調査課により発掘調査が進められた結果、7世紀後半から9世紀の製鉄炉123基・木炭窯140基・堅穴住居跡121棟・鍛冶炉16基・掘立柱建物跡10棟など全国最大の調査数を誇り、内容においても古代の鉄生産に関する技術や社会的背景などを知る上で多大な成果が報告されている(註11)。

この時期になると、土師器や須恵器を出土する集落が増えるが調査例は少ない。変化としては新田川や太田川流域の河岸段丘の平坦面、あるいは自然堤防上など、これまで遺跡が少なかった平野部の微高地にも多くの遺跡が立地している。特に延喜式内社の押雄神社・冠嶺神社を中心とする北長野一帯、多珂神社・日祭神社を中心とする大薨一帯、太田川中流域の上太田一帯、桜井の河岸段丘面に多く所在しており、全体として、かつての野馬追原を取り囲むような立地構成をしている。大薨地区圃場整備事業に関連して平成2年(1990)に範囲確認調査が実施された米々沢の竹花A遺跡では、奈良～平安時代の堅穴住居跡3棟が確認(註12)されており、平成4年(1992)には上北高平の高松B遺跡でも奈良～平安時代と推定される堅穴住居跡2棟が試掘調査により発見されている。

中世の遺構として城館跡が挙げられるが、信田沢の内城のように現在では所在地不明のものや城館の構造が不明確のものも多い。その中でも、北泉の泉館跡は、中世山城の典型的な形態をとどめている。館主は相馬氏の一族の泉氏の館跡といわれ、その重要性から市指定史跡となっている。他にも、牛越城跡・大薨七館の一つである明神館跡・奥州下向の際、最初に相馬氏の拠点となった別所の館跡などが比較的良好な中世山城の形態を残しながら所在しており、在地の領主の館跡も丘陵上や平野部の各地に点在しているが、発掘調査の手続きもなされないうまま、部分的な破壊を受けているものも見受けられる。

中世の村落遺跡の把握は難しいが、米々沢の谷地畑遺跡はその可能性が高い。平成2年に範囲確認調査が実施(註12)され、祥符元寶などの北宋銭が出土しており、近世にかけての遺跡と推定される。遺跡は奈良～平安時代の集落竹花A遺跡に隣接し、太田川北岸の自然堤防上に立地している。

中世末の館跡である泉平館跡は、相馬一族の長、岡田氏の居城とされ、短期間に使用された館であるが、ほ場整備事業に伴い、平成7年度に主郭から南側の発掘調査が実施された。小規模な畝堀を伴う堀跡と出入口が見つかった。

近世の遺構として、初頭期の慶長2年(1597)から同8年(1603)に相馬氏の居城として再整備されて使用された牛越城跡や中期初頭の寛文6年(1666)以降に築かれた野馬土手及び出入口となる木戸跡がある。野馬土手は、野馬追に欠かせない野生馬の保護に力を尽くしてきた結果、増殖した馬が畑の作物を荒らしたり、放散しないように雲雀ヶ原扇状地を囲むように、東西約10km、南北約2.6kmに築かれたものである。大部分は土塁であるが、石垣としていた所もある。平成5年には、小高町が菖蒲沢で石垣の野馬土手の一部分を調査している。現在ではほとんどが消滅してしまっており、その保護が急がれるが、昭和62年(1987)の桜井野馬土手の範囲確認

調査(註13)及び、平成5年の牛来、歴史民俗資料館予定地における調査では、土手の規模と内側に溝を掘っていた状況が確認されている。木戸跡は、多い時で30数ヶ所が設けられていたといわれているが、現在その姿をとどめているものは市指定史跡の羽山岳の木戸跡一ヶ所だけとなっている。

近世後半から近代にかけては藩営の大規模なたたらとして馬場鉄山があり、周辺の小規模なたたらとしては財団法人福島県文化センター遺跡調査課により調査された馬場の五台山B遺跡、片倉の羽山B遺跡が阿武隈高地の山間部に遺されている(註14)。

- 註1 1990 寺島文隆他『原町火力発電所建設関連遺跡調査報告書』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 註2 1994 武田耕平『県道相馬浪江線付替え工事関連遺跡発掘調査報告書 睦原F遺跡』原町市教育委員会
- 註3 1983 長島雄一『赤沼遺跡試掘調査報告』原町市教育委員会
- 註4 1992 竹島國基『桜井』
- 註5 1996 辻 秀人他『桜井高見町A遺跡発掘調査報告書』東北学院大学文学部史学科辻ゼミナール・原町市教育委員会
- 註6 1985 玉川一郎他『国指定史跡桜井古墳範囲確認調査報告書』原町市教育委員会
- 註7 1969 竹島國基他『原町市高見町1号墳・与太郎内1号墳調査報告』原町市教育委員会
- 註8 1965 竹島國基他『原町市高林古墳群調査報告書』原町市教育委員会
- 註9 1974 波邊一雄他『羽山装飾横穴発掘調査概報』原町市教育委員会
- 註10 1984 戸田有二『考古学研究室発掘調査報告書 福島県原町市・入道迫瓦窯跡』国士館大学文学部考古学研究室
- 註11 1991 寺島文隆他『原町火力発電所建設関連遺跡調査報告書』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 1992 寺島文隆他『原町火力発電所建設関連遺跡調査報告書』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 註12 1991 玉川一郎他『原町市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』原町市教育委員会
- 註13 1988 玉川一郎『野馬土手跡範囲確認調査報告書』原町市教育委員会
- 註14 註1に同じ



## 第3章 原町市をとりまく環境

### 第1節 遺跡の位置

前屋敷遺跡は、福島県原町市上洪佐字前屋敷に所在し、JR常磐線原ノ町駅の東、直線距離で約2.5kmの地点にある。遺跡は阿武隈高地から東に派生する相双丘陵を、太平洋に注ぐ新田川が開析した第4段丘上に立地し、標高は約6～8mを測る。東経約141°0′10″、北緯約37°38′10″に位置している。遺跡の西方約9kmには阿武隈高地東縁部と浜通り低地地帯を地質的に画する双葉断層(岩沼-久ノ浜構造線)が南北方向に走っている。

### 第2節 周辺の遺跡

前屋敷遺跡(1)は縄文時代の繊維土器、奈良・平安時代の土師器が拾える周知の遺跡である。遺跡の立地する第4段丘面の周辺は、都市計画区域では工業地域となっているが、個人の宅地やアパートのあいだに畑地が残っている地域である。段丘から北側の新田川までは沖積地で、水田が広がっている。遺跡の面積は約50,000㎡と推定されており、今回の調査場所は遺跡の北西部にあたっている。また、江戸時代に築かれた野馬土手の出入口である木戸跡がこの周辺にあったといわれている。

今回は第2次調査であるが、第1次調査は今回の調査の直前まで、東側の隣接地で、宅地造成に伴い実施していた確認調査である。調査の結果、縄文時代早期末葉から前期前葉の竪穴住居跡、同時期の繊維土器、弥生土器、古墳時代前期の竪穴住居跡、土師器・須恵器、平安時代の鍛冶工房跡などが確認された。特に古墳時代前期の住居跡からは土師器の杯・高杯・甕・小型壺が一括で出土している。

前屋敷遺跡の西側には同じ段丘の縁辺に国指定史跡桜井古墳(2)を中心とする桜井古墳群がある。桜井古墳群のうち、高見町中継ポンプ場のある沢から東側は上洪佐支群(3)、西側は高見町支群(4)と呼んでいる。上洪佐支群には桜井古墳の他に、小円墳9基と方墳1基が現存している。

国史跡桜井古墳は前方後方墳として東北第4位の規模を誇り、昭和58年(1983)に範囲確認調査が行なわれ(註1)、軸長約72mの墳丘部に、幅約11～20mの周溝が巡っていたことが確認されたことで、国史跡範囲の追加指定を行なっている。現在史跡整備の計画が進められている。

高見町支群では、昭和42年(1967)に、墳丘部直径約12mの円墳である高見町1号墳の発掘調査が行なわれ、粘土施設を伴う割竹形木棺の痕跡が確認されている(註2)。現在では現存するマウンドが4基のみであるが、近年の発掘調査により、多数の円墳が確認されている。すなわ

ち、平成5年(1993)の東北学院大学担当の調査(註3)では円墳1基、平成7年度(1995)の市教育委員会の調査では円墳8基、刳抜石棺3基、箱式石棺1基を検出している。

桜井古墳群の所在する範囲はまた、弥生時代中期後葉の標式遺跡である桜井遺跡(註4)の一部分にあっている。桜井遺跡は現在の大字上洗佐にある桜井A～D遺跡(5～8)・桜井荒屋敷遺跡(9)と高見町の高見町A遺跡(10)・高見町B(11)遺跡までを含む広い範囲を有しているが、最近では確認調査も十分に実施され無いまま宅地やアパートの建築が進んでいる。

このうち桜井A遺跡では、桜井古墳の東隣の部分について、雨水管渠築造工事に伴い、平成6年度(1994)に発掘調査が実施され、弥生時代の溝跡1条、古墳時代の溝跡1条、江戸時代の野馬土手の内堀2条、近現代の土坑6基が検出されている。

桜井荒屋敷遺跡では、下水道の高見町中継ポンプ場建築に伴い平成5年(1993)に試掘・発掘調査が行なわれ、段丘縁辺の斜面から、縄文時代晩期から弥生時代中期ごろの土坑1基が調査された。

また、平成5年に東北学院大学の担当のもと調査された高見町A遺跡では、先の述べた円墳の周溝1基のほか、弥生時代の中期末に位置付けられる十王台式土器を出土し、その北限となる堅穴住居跡が2棟、古墳時代前期の埴釜式期の堅穴住居跡2棟が発見されている(註3)。平成7年(1995)には市道予定区域とその西側の部分について発掘・試掘調査が実施され、古墳8基、周溝を伴わない刳抜石棺3基の他、弥生時代から古墳時代の堅穴住居跡21棟が確認されており、同古墳群の密集の高さをあらためて示しており、この地域が弥生時代から古墳時代への変遷や古墳の出現過程について極めて重要であることを物語っている。この時の調査では、調査区の南端に、江戸時代の野馬土手の内堀跡も確認されている。

野馬土手についてはこの他、昭和62年(1987)の桜井野馬土手の範囲確認調査(註5)では、土手の規模と内側に堀を掘っていた状況が同様に確認されている。

以上が桜井古墳周辺の遺跡の状況であるが、平成5年以降の発掘調査のうち、東北学院大学担当の調査を除いては、調査の内容について未報告である。

前屋敷遺跡の南西、桜井遺跡の南側には、土師器・須恵器の破片が散布している原田遺跡(11)が所在し、その南側には浜通り高等技術専門校建設に伴い平成4年(1992)に発掘調査された巢掛場遺跡(12)(註6)がある。調査の結果、平安時代以前の溝跡1条、平安時代頃の溝跡5条、平安時代以降の土坑1基、時代不明の焼土跡1基が検出されている。

この他、前屋敷遺跡の南側には弥生土器が散布する原山遺跡(13)、弥生土器・土師器・須恵器が散布する萱浜原畑遺跡(14)、縄文土器が散布する巢掛場B遺跡(15)、赤沼遺跡(16)が所在している。赤沼遺跡は昭和57年(1982)に試掘調査が実施され、縄文時代前期前葉の織維土器が出土しており、ほ場整備に際し盛り土による保存が行なわれた(註7)。

- 註1 1985 玉川一郎他「国指定史跡桜井古墳範囲確認調査報告書」原町市教育委員会
- 註2 1969 竹島國基他「原町市高見町1号墳・与太郎内1号墳調査報告」原町市教育委員会
- 註3 1996 辻 秀人他「桜井高見町A遺跡発掘調査報告書」東北学院大学文学部史学科辻ゼミナール・原町市教育委員会
- 註4 1992 竹島國基「桜井」
- 註5 1988 玉川一郎「野馬土手跡範囲確認調査報告書」原町市教育委員会
- 註6 1993 武田耕平「(仮称)福島県立浜通り高等技術専門校建設関連遺跡発掘調査報告書 栗掛場遺跡」
- 註7 1983 長島雄一「赤沼遺跡試掘調査報告」原町市教育委員会

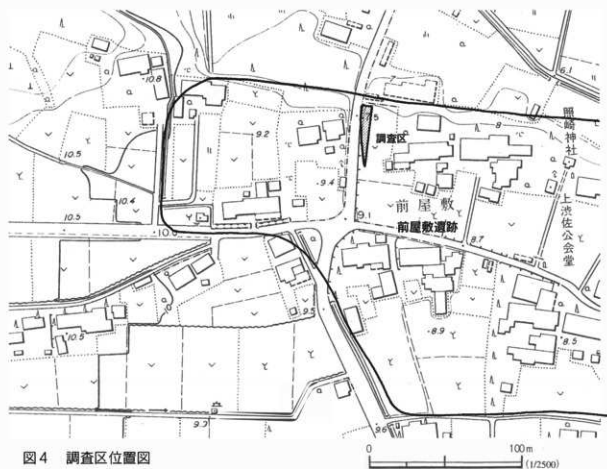


図3 周辺の遺跡

## 第4章 調査経過

### 第1節 調査要項

遺跡の名称	前屋敷（まえやしき）遺跡
所在地	福島県原町市上洪佐字前屋敷140-3
調査面積	237.8㎡
委託期間	平成7年8月23日から平成8年3月15日まで
調査期間	平成7年8月28日から9月29日まで
委託金額	2,835,000円
調査主体	原町市教育委員会（教育長 渡部秀夫）
調査担当	原町市教育委員会文化課
発掘作業員	押野己之助 諏佐忠男 佐藤整 佐藤文江 武志正信 北原洋
整理作業員	山本恵子 遠藤和子 古谷洋子 太田正子 寺内美智子 阿部路代 相良英樹



## 第2節 調査方法

調査区が狭いこともあり、小グリッドの設定はしていない。表土剥ぎをバックホーで行なった後、遺構検出作業を行ない、検出した順に、遺構の種別ごとに遺構番号を付し、精査を行なった。遺構は2分割して土層断面図を作成、写真撮影し、残り半分を掘りあげた。遺物は遺構ごとに取り上げ、包含層の遺物は層ごとに取り上げた。

## 第3節 調査経過

- |           |                           |
|-----------|---------------------------|
| 8月28日     | バックホーによる表土剥ぎ。             |
| 9月1日～13日  | 遺構検出作業。                   |
| 9月18日     | 木炭窯跡の精査。北側斜面部の遺物包含層の掘り下げ。 |
| 9月19日     | 包含層から古墳時代前期の土師器、石製模造品出土。  |
| 9月20日～28日 | 土坑、焼土跡精査。包含層掘り下げ。         |
| 9月29日     | 発掘調査区の地形図作成。              |
| 10月3日     | 現場引き渡し。                   |

## 第5章 調査成果

### 第1節 基本層序

調査区は、第四紀洪積世に形成された第4段丘の縁辺に位置しているため、地形は北側に向かって緩く下がり、約2mの比高差を以て下段の沖積層にいたる。斜面部以南の段丘上では、第I層は表土(L I)で厚さは約15cmである。L Iのすぐ下が黄褐色土の地山(L III)となる。斜面部ではL Iを土質や色調によって4層に分けることができた。L IIは黒色粘土であるが、掘り下げ途中で湧水が生じ、この辺りから下位(L II b)では黒色土に植物遺存体が多く混ざり、ピートモスのような状態となっている。段丘平坦面で黄褐色土であった地山は斜面部では下位に至り黄褐色砂質シルト、さらに砂礫層となる。

L I、L IIは遺物包含層である。

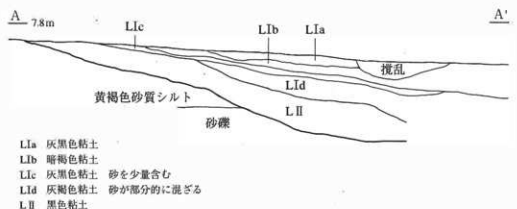


図5 北斜面土層断面図

0 2m  
1/160

X = 182.050  
Y = 103.205

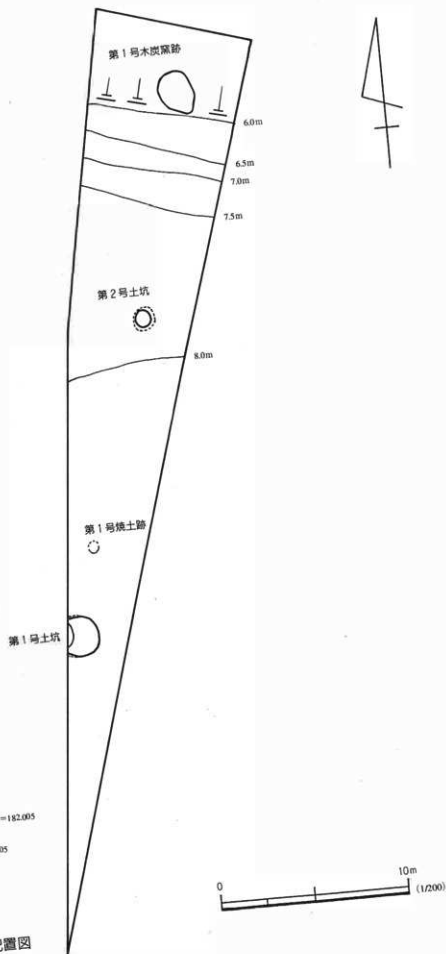


図6 遺構配置図

## 第2節 遺構と遺物

### 1 土坑

#### 第1号土坑

調査区の南側で検出した。検出面はL I直下の地山のL IIIである。西側を現在の道路を作るときの揚壁工事により壊されており、南から東側にかけては、攪乱により壊されている。

平面形は円形で、断面はややフラスコ状を呈するが、底面の一部がさらに凹んでいる。直径は約190cm、検出面からの深さは最大で90cmを測る。

覆土は2層に分けることができた。第1層は暗褐色土で締まりは良く、黄褐色土が少し混在している。第2層も暗褐色土であるが、第1層に比べ締まりはやや弱く、黄褐色土は多く混在している。

遺物は、弥生土器1片、土師器76片、須恵器2片、陶磁器4片が出土した。土師器は大半がロクロ不使用のものであるが、ロクロ使用の杯4片には底部が回転ヘラケズリ再調整のものも含まれている

遺構の時期は、出土遺物から奈良・平安時代ごろと考えられる。

#### 第2号土坑

調査区の中央からやや北側で検出した。検出面はL I直下の地山のL IIIである。

平面形は円形で、断面はフラスコ状を呈する。直径は約110cm、検出面からの深さは最大で84cmを測る。

覆土はにぶい黄褐色土の単層で、底面に汚れが認められた。

遺物は、出土していない。

遺構の時期は、出土遺物はないものの、覆土に黒色土の堆積がなく、形状がフラスコ状を呈することから、縄文時代に属すると推定される。

### 2 焼土跡

#### 第1号焼土跡

調査区の南側、第1号土坑の北側で検出した。検出面はL I直下の地山のL IIIである。北側を隣接する宅地造成にかかる侵入路工事により削平されている。

平面形は楕円形と推定される。最大の長さは64cm、被熱による赤色化の厚さは3cmである。出土遺物は無い。

遺構の時期は、不明である。



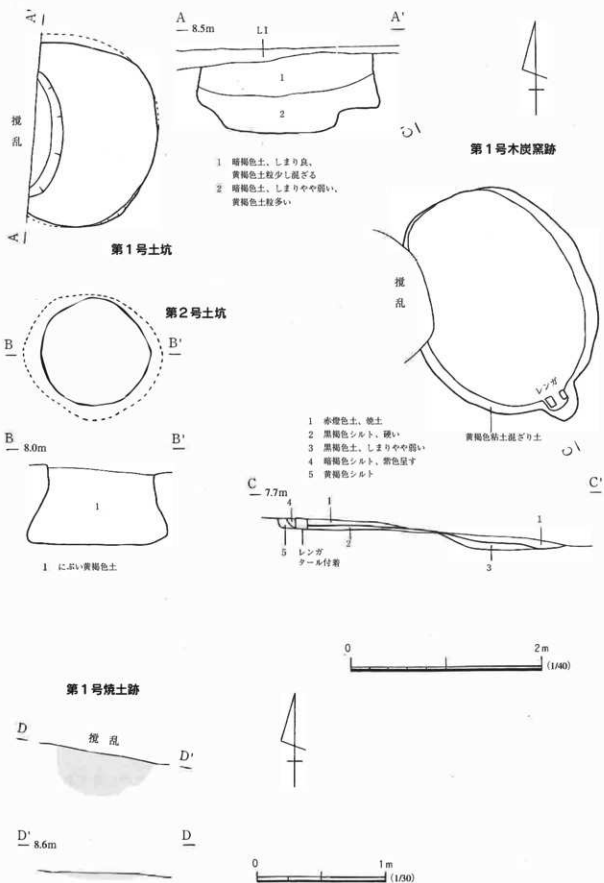


図7 第1・2号土坑、第1号木炭痕跡、第1号焼土跡

## 3 木炭窯跡

## 第1号木炭窯跡

調査区の北縁で検出した。検出面はL I b上面である。

上部構造は遺存しておらず、基底部のみの検出である。

平面形は楕円形を呈する。大きさは煙道部を入れて長軸265cm、短軸194cmを測る。検出面は赤褐色の焼土で、その下は黒色土である。黒色土のうち南東側は硬く下部は紫色を呈している。本体の底面では周縁に黄褐色粘土が厚さ前後10cmでめぐらされている。煙道部の底面には両側に煉瓦を配している。

遺物は、煉瓦が2個である。

遺構の時期は、出土遺物から近代あるいは現代と推定される。

## 4 遺構外出土遺物

縄文土器15片、弥生土器34片、土師器891片、須恵器37片、陶磁器43片、瓦器5片、石器4点、石製品3点、銅製品2点、鉄滓1点を数える。

ほとんどがL I出土であるが、L IIから縄文土器1片、弥生土器1片、土師器143片、須恵器14片、陶磁器3片、石器1点、石製品1点が出土している。

## 縄文土器（1～4）

1は断面三角形の沈線が平行に施文されている。早期沈線文系土器に比定できる。2・3は胎土に繊維を含むことから早期末葉から前期前葉に相当する。4は0段多条が施文されている前期前葉の土器である。

## 弥生土器（5～13）

5～8は2本1対の沈線による平行沈線で幾何学的な文様を描く土器である。5は口縁部で横走する平行沈線が施文されている。6は口縁から頸部にかけての破片で横位の隆帯の下位に横走する平行沈線が2段まで確認でき、その間に右下がりの平行沈線を施している。7は同心円文を、8は菱形文をそれぞれ平行沈線で描いている。これらは桜井式土器に比定できる。

9～13は縄文を施文する土器である。9は条に乱れがみられることから直前段反撚りと判断される。10は条が直線であることから付加条よりは撚糸文と考えられる。12・13は繰り返す深い条が現われることから直前段多条と考えられる。

## 土師器（14～23）

製作に際しロクロを使用しない土師器には、杯・高杯・壺・甕・甔、筒形土器がある。このうち筒形土器は平安時代に特徴的な土器であるが、他は古墳時代から奈良時代のいづれかのう

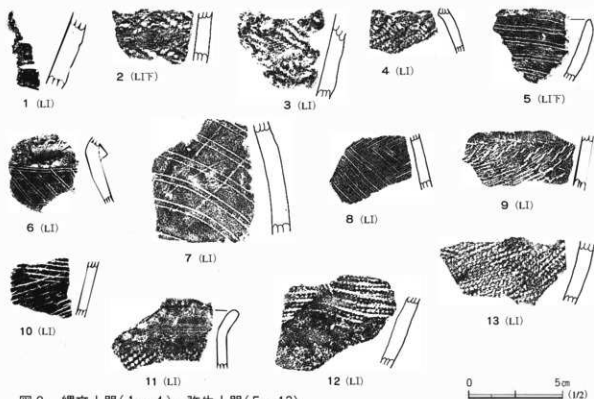


図8 縄文土器(1~4)・弥生土器(5~13)

ち、破片資料や接合個体の特徴から推定できるものを除いては、時代を特定することは困難である。また、器種分類においては、杯と高杯、壺・甕・瓶について明確に分類できないものも多かった。破片点数は870片を数える。

ロクロ使用の土師器には、杯・高台杯・甕、赤焼土器がある。杯・高台杯・甕は平安時代に属すると考えられる。赤焼土器は平安時代以降に属する。ここでは便宜上、土師器にいている。破片点数は111片を数える。

ロクロ使用の土師器はほとんどが破片資料であるため、ロクロ不使用の土師器について図を掲載した。14~21は高杯である。杯部下位には稜が形成され、口縁部は緩やかに外側に開く。調整は内外ともヘラナデが多用される。17は稜の部分に極端な張り出しを巡らせている。脚部は中空で、円筒形のもの(14・18・20)とやや開いて裾部にいたるもの(15~17)とがある。19はやや開いたのち裾部との接合部分で若干くびれる。脚部と裾部の接合部には明瞭な屈曲がある。18の裾部はほとんど水平に作られており、端部はやや外反気味になっている。脚部内側にはシボリ目がみられる。シボリ目は15にも観察できる。20と21は同一個体である。これら高杯の形及び製作技法の特徴は南小泉式の範疇でとらえられる。

22は甕で外側に指頭痕がみられる。23は壺の底部で台状になっている。底部外面は平滑にナデられている。

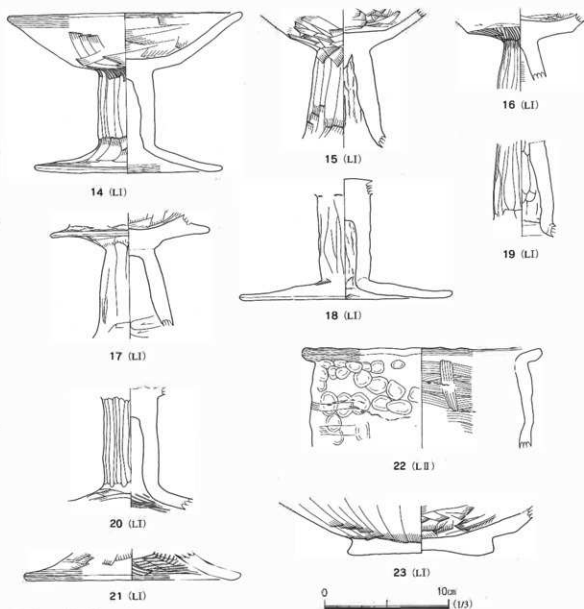


図9 土師器

須恵器

杯4片、瓶2片、壺・甕27片、その他4片である。

陶磁器

土瓶・急須・茶碗・摺鉢がある。従来であれば大堀相馬焼とされるところであるが、近年相馬市小野地区、鹿島町塩の崎地区で近世の窯跡が確認あるいは調査されており、これらとの比較・研究が望まれる。

石器 (24)

剥片2点、石鉞(打製石斧)1点、砥石1点である。24は粘板岩製で弥生時代に属するもの

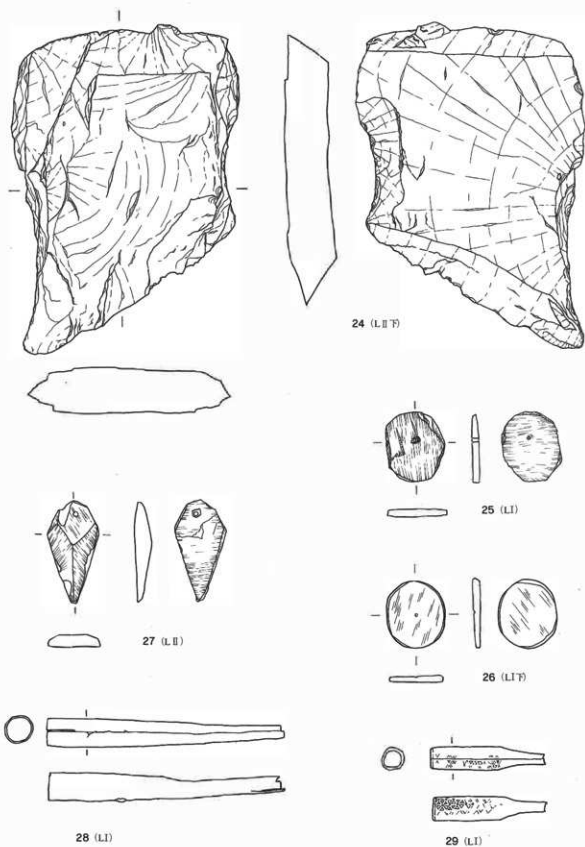


図10 石器・石製品・銅製品



と考えられる。

#### 石製品 (25-27)

すべて石製模造品で古墳時代前期に属すると考えられる。石質はすべて粘板岩である。25・26は鏡形、27は剣形である。25・27は穴が1つあけられているが、26には穿孔の痕跡はあるが穴はあいていない。

#### 銅製品 (27・28)

2点ともキセルの吸い口である。両者とも合わせ目が確認できる。28では細かい三角文が観察される。技法は判然としないが、三角の凹みの形が鋭いことから打ち出しではなくタガネ状の工具で切られたものと推定される。

## 第6章 まとめ

### 遺物

縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、近世に属するものが出土している。市内ではこれまであまり出土していない、石製模造品及び古墳時代前期の土師器が注意される。

### 遺構

遺構密度は低く、縄文時代、奈良・平安時代、近・現代の遺構が若干検出されるにとどまった。

### 遺跡

報告書未刊であるが、第2次調査と同年実施の宅地造成に伴う第1次調査では、縄文時代早期末葉から前期前葉、古墳時代前期、平安時代の堅穴住居跡が発見されている。このことから今回の出土遺物、検出遺構は、各時代の集落跡の一部であると考えられる。特に、古墳時代の集落跡については、調査区の西側に国史跡桜井古墳を中心とする桜井古墳群と弥生時代から古墳時代の遺跡である桜井遺跡があることから、これらとの関連が注目される。



写真1 遺跡近景(北から)



写真2 調査区全景(北から)





写真3 遺跡近景(南から)



写真4 第1号土坑(東から)



写真5 第2号土坑(東から)



写真6 第1号焼土跡(南から)



写真7 第1号木炭窯跡(南東から)



写真8 北斜面土層断面(南東から)

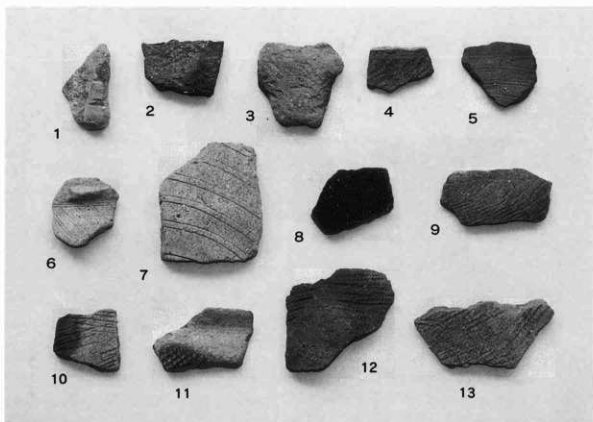


写真9 縄文土器・弥生土器

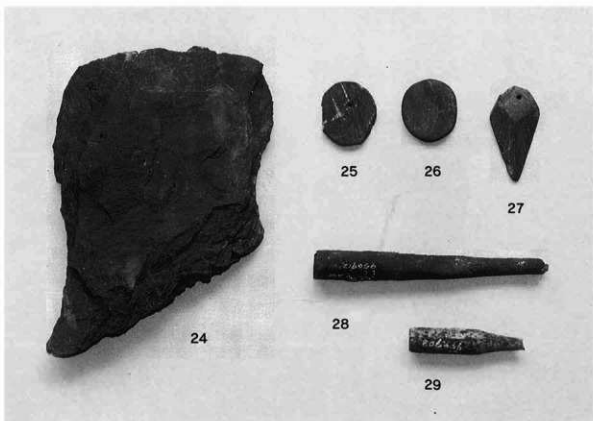


写真10 石器・石製品・銅製品

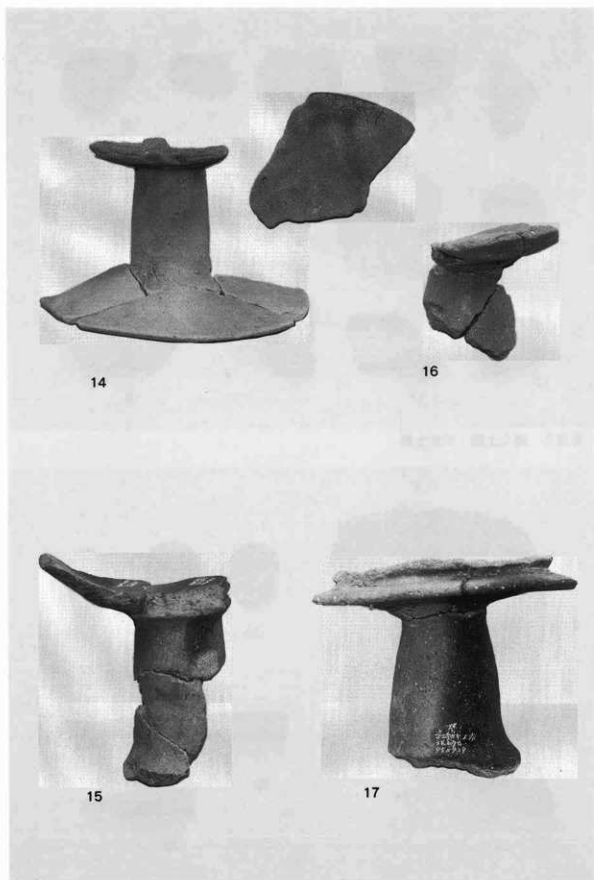


写真11 土師器(1)

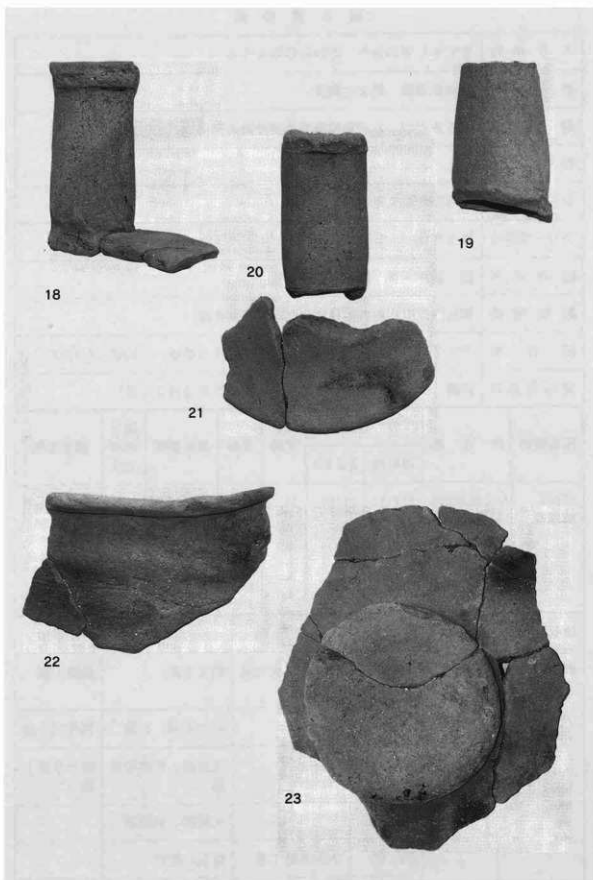


写真12 土師器(2)

報告書抄録

ふりがな	まえやしきいせき だいにじちょうさ							
書名	前屋敷遺跡 第2次調査							
副書名	ふるさとづくり道路整備事業関連遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	原町市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第13集							
編著者名	掘 耕平・荒 淑人・相良英樹							
編集機関	福島県原町市教育委員会生涯学習部文化課							
所在地	〒975 福島県原町市三島町二丁目45番地 0244-24-5284							
発行年月日	西暦 1997年3月31日 (平成9年3月31日)							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まえやしき 前屋敷	ふくしまけん 福島県原町市 しかしぼざ 市上波佐字 まえやしき 前屋敷	07206	00106	37° 38' 10"	140° 00' 10"	19950823 ～ 19950929	238	県道改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
前屋敷	集落跡 散布地 生産遺跡	縄文時代 前期前葉	フラスコ状土坑 2基	縄文土器		織維土器		
		弥生時代		弥生土器、石甌		桜井式土器		
		古墳時代 前期		土師器、石製模造品		南小泉式土器		
		鉄・鞍時代		土師器、須恵器				
		鉄・鞍	木炭窯跡1基	煉瓦、煙管				
	その他	焼土跡1基						

原町市埋蔵文化財調査報告書 第13集

ふるさとづくり道路改良工事関連遺跡発掘調査報告書  
前屋敷遺跡（第2次調査）

平成9年3月31日 発行

発行 福島県原町市教育委員会  
〒975 福島県原町市本町二丁目27番地

印刷 有限会社ライト印刷  
〒975 福島県原町市北新田字信田370番地-1